

文部科学省に聞く!



初等中等教育局
参事官(高等学校担当)

塩川達大

しおかわたつひろ ● 1996年4月
文部科学省入省。岐阜県教育委員
会学校支援課長、初等中等教育局
児童生徒課課長補佐、スポーツ庁政
策課学校体育室室長などを経て、
2019年7月より現職。

常に自分をアップデートできる人材に必要な資質・能力の育成

—新学習指導要領がめざすものは?

現在、大学の経営や教育を担う皆さんが高校生だった頃と、社会や高校、高校生の様相は様変わりしています。平成2年をピークに高校数は約1割、生徒数は約4割減少し、ICTも大きく革新しました。30年前はワープロが普及し始めた頃。デジタルネイティブの今の高校生には想像もできない時代でしょう。しかし、これからは、今まで以上に変化が加速的に訪れ、不確実性が増します。そうした社会においては、生涯にわたって自分自身を常にアップデートしていくことが不可欠です。その基盤となる資質・能力を育成することが、高校段階の新学習指導要領のゴールだと捉えています。

新学習指導要領は2022年から年次進行で実施されます。すでに一部の高校は「自校ではどういう教育を提供していくのか」を議論し、カリキュラム・マネジメントの確立に取り組んでいます。高校も大学と同様、3ポリシーを明確化するべきだと教育再生実行会議でも検討されています。

私見ですが、日本の学校では制度発足時の「知識を伝授する」というサプライヤーの発想に傾きすぎた授業が今も少なくないと思います。しかし、不確実性

高校から見た高大接続改革の課題は? —学修者本位の指導と評価に転換を

が高まる社会においては、「学修者の視点に立った教育の提供」がより求められるのではないのでしょうか。

学修者本位の教育を 高校と大学がシームレスにつなぐ

—高大接続への取り組みと課題は?

「高校生に多様な学びの場を提供する」という観点の重要性が増しています。その意味では、大学との連携も必要でしょう。地域や他の高校との連携も進めていくべきでしょう。文科省は本年度からイノベティブなグローバル人材を育成する「WWLコンソーシアム構築支援事業」*を開始しました。コンソーシアムには海外の高校、大学だけでなく、国内の大学にも積極的に参加してもらいたいと考えています。

これまで日本の大学入試はペーパーテストによるものがほとんどでした。入試にかかるコストが少なく済むうえに、公平性の高さに重きが置かれてきたためです。しかし、これからは定量化しにくい資質・能力も、入試で見ていく努力が求められます。推薦では「全国大会で〇位」といった基準が用いられたいしてはいますが、もっと「高校生活で何を学んで、どう成長したか」を評価すべきではないのでしょうか。近頃は、生徒の学びによる変容を可視化するために、ポートフォリオを取り入れる高校が増えています。これを高大接続に生かすためには、ポートフォリオを導入する高校、それを入試で活用する大学の両方が増えていかなければなりません。文科省としては好事例を紹介して、横展開することで改革を推進することを考えています。

社会的なコンセンサスを得ている入試のあり方を変えるのには時間がかかります。粘り強く、学修者本位の教育の流れを高校と大学が大きくし、シームレスにつなげていきませんか。それこそがSociety5.0時代の高大接続がめざすべきあり方ではないのでしょうか。

■高等学校教育改革のスケジュール

年度	2019年度	2020年度	2021年度	2022年度	2023年度	2024年度
教育課程の見直し	教科書作成・検定・採択・供給			新学習指導要領(年次進行で実施)		
学習指導方法の改善、 教員の指導力の向上	制度改正に基づく教員の養成・採用・研修の充実					
多面的な評価の充実	多面的な評価の推進 ・学習評価のあり方を見直しや指導要録の改善 ・学習成果を多面的に評価するツールとしての民間検定等の活用の促進 ・生徒自身の自発的なキャリア形成を促す方策の推進			新学習指導要領をふまえた対応		
「高校生のための 学びの基礎診断」の しくみの構築	「学びの基礎診断」 実施開始	検証・見直し		新学習指導要領に 対応した診断開始		

*文部科学省「高大接続改革の進捗状況について」2019年1月より

*ワールド・ワイド・ラーニング コンソーシアム構築支援事業、詳細はP.19参照